

吉野ツアー報告

光島善正

9月10日（土）・11日（日）例年恒例の関西自然住宅推進ネットワークの研修ツアーとして奈良県の吉野に行ってまいりました。今回参加者は8人。以前より関西自然住宅推進ネットワークの勉強会で数回講師をしていただいた吉野で紙漉きをしておられる植さんのご尽力により実現しました。

9月10日（土）午前10時に近鉄京田辺駅に集合し、車で24号線～169号線を南下して大淀町の道の駅吉野路大淀センターに11時30分過ぎに着き昼食をとりました。この道の駅は地場でとれた生鮮野菜や農産品、その加工品、吉野葛関連の食品、吉野材を使った木工品等々、品揃えが充実。お客さんがいっぱい駐車場が満杯でした。それから吉野林材振興協議会の吉野・北山・十津川流域林業活性化センターには午後1時に到着しました。

センターの常務理事西本順蔵氏に案内していただき、先に山を見せてもらうことになり、車で30分位の大滝ダムの上の山に行きました。樹齢100年生位の杉山で手入れが行き届いたきれいな山でした。隣接する間伐前の50年生位の山と比べると山の美しさは見事でした。密植を基本としているので枝打ちをそんなにしなくてもよく、間伐をまめにしていけばよい山になります。吉野は山持ちとは別に、山を手入れ管理を専門職とする山守を山に置き管理されてきました。他の産地に比べ、手入れされたよい山が吉野には多くある要因でしょう。また林道も結構整備されていてさすが林業先進地だと感じました。最近では林業の会社にも若い従事者も増え、なかには若い女性もおられるとの事でした。



センターに戻って土場とストックヤードを見学させていただきました。どちらも市が終わった後でピークの状態ではなかったのですが、材を見せてもらい、色や目等材質は素晴らしくやはり吉野材だと感じました。ただ、西本さん曰く、今の売上はピーク時の3分の1まで落ち込んで「生き残るのはたいへん」だそうです。個人的な意見ですが、あれだけの山、材の質、量どれをとっても1番なのに、吉野の一人勝ちだと思っていたのに、日本中の山でどこが生き残っていけるのでしょうかね。とにかく頑張ってもらいたいです。



その後、桜で有名な吉野の中千本の金峯山寺の蔵王堂へ。その門前の茶店（中井春風堂）で吉野本葛の葛切りのつくるところを見学し、ごちそうになって参拝しました。蔵王堂はさすがに大きく、柱も数百年生の木を使っていました。こんな山の上にもどうやって建てたのでしょうかね。

夜は民宿「花夢・花夢」さんに宿泊。宴会には植さんも参加



2日めは、朝吉野山の上千本の展望台で吉野を一望した後、植さんの植和紙製造へお伺いして和紙漉きを体験しました。表に紙の原料となる楮（こうぞ）が干ししてありました。楮の皮の白い部分を使うのですが、皮をむいた後の木の枝も使い道がないそうですが表面がつるつるで何かに利用できないかなと思うようなものでした。今回はハガキを漉きました。原材料は楮と杉・桧の面皮とパルプを釜で煮てつなぎにイモを入れたもので、前準備はすべて植さんがしてくれ、我々は漉くだけです。植さん手本を見せてくれました。思ったより簡単に見えました。木の枠を持ち、むらがないように漉くのです

が、やってみるとこれがなかなか難しく、やり直す人もありました。さすが植さんでした。漉いたハガキに葉っぱ等でデコレーションして後は乾燥です。乾燥するのに時間がかかるので、次の体験マイ箸作りに行きました。



辰田製作所さんです。吉野材の原木から柱等をとった後の部材を使い箸を作っておられます。吉野材の行こう利用を知ってもらうために箸づくりの体験を始められました。箸の大まかな形はできているので、サンドペーパーで形を整え、箸に熱で焦がして描くペンで文字や絵を描きます。それをきれいにラッピングして完成です。



出来上がった箸を持って植さんところに。こちらも乾燥できたハガキの表に郵便番号と「郵便はがき」のスタンプを押して出来上がりです。

その後、植さんの紙漉きや辰田さんの箸作りや木工を体験でき、地場の工芸品を展示販売している「ものづくりの里」を見学し昼食をとりました。

吉野の山は、その地域で受け継がれてきた様々な仕事におおきな恵みを与え、それにかかわる人たちに守られているのだと感じました